

遙かなる風雪

実録 柴田音吉洋服店

①

近代のあけぼの —近江商人の血を受けて—

1974年10月8日、神戸は街をあげてのファッション・パザールに湧いていた。

そのさなか、小雨にけぶる六甲山系を背に、市内の緑地公園、東遊園地では、仕立てのいいセビロを着た初老の紳士たちを中心に、400人の目がいましも白布をとり除かれようとする石造彫刻に注がれていた。

「雨合禮服ニハ洋服ヲ採用ス」明治5年11月12日、太政官布告第339号が発布されてからこの年でもちょうど100年神戸に近代洋服が生れてからはすでに100年余を経る。

記念事業としての顕彰碑建立の声は、この年の前からセビロを作り続けてきた人びとの間で次第に大きくなっていった。それから1年。

とり除かれた白布の下から日本近代洋服発祥の地と彫られた碑文石が、そしてセビロ紋断図を型どった3個の石造彫刻が次つぎに花嵐岩のまぶ



一代で日本屈指の洋服店主となった柴田音吉は、嘉永6年近江商人の子として生れた。

者たちが促えて造り上げた、その完成品の除幕式だ。

× × ×

顕彰碑建立委員会会長のいかめしい肩書を書いた大きなリボンフラワーを胸に、柴田高明さんの想いはジーンズからフロック・コートの「ひい爺」の写真へ、そして昔語りの懐袖の丁稚たちが働く仕事場へ、とりとめもなくひろがっていく。

神戸洋服の先覚者、の名で呼ばれる「ひい爺」の記憶はほとんどない。9つのとき、大潮の引くようにみまかった

弟の専務、祐三さんも思う。

そんなわけだから、うすもやの向うにかすみはじめた胎動期の柴田音吉洋服店を手探りしようとする、当時、徒弟、ぼうずと呼ばれ、いまは自述の余生を楽しむ数少ないひとびとの口から聞く昔話によるしかない。

人の脳裡から消え去らない古い記憶はしばしばあらゆる分野の歴史を支えてきた。昔話は、ついこの間の記憶よりはほとんど正確だということをも多くの人は認めている。

初代柴田音吉についての伝え話もまた、残存する古老たちの手のひらを暖め続けてきた、確かな、そして消えぬともし火であるに違いない。

× × ×

嘉永6年 柴田音吉は滋賀縣近江の商家に呱呱の声をあげた。福賀の海の彼方、水平線にぼつ然と黒い船容が姿を現わした、その年である。明治へ翔る近代の歯々たる夜明け——重く閉ざされた封建制度の壁が音を立てて崩壊しようとする、その前夜だった。

武家階級の衰退とともにほうはいと力を増していった町人階級、その代表的な集団としての近江商人のたくましい商法は、その後長い間の誇り草になった。

一代で日本屈指の洋服店主となった柴田音吉に、このたくましい近江商人の血が流れていたことは、うなずける要素と見なされなければならない。(つづく)

その葬式のもようも、今となってはうすもやの向うにともしれば消えていく。

振り返るひまがなかった、と思う。3代続いた柴田の流れは、前にしか進むことを知らなかったから。

大福帳も散逸し、確かな記録類はほとんど残っていない。そのようにして後を振り返ることなく營々と続いてきた洋服屋でありラシャ屋であった。

社史、などという「大げさ」なことも、この柴田の社風にはいかにもふさわしくないのだった。いく度か公共機関からも記録編纂を促がされながら、いまだに手つかずに過ぎた、地味にひかえめに言葉げせず——ただ前を向いて社業だけに精出す。それでよかったのだと柴田さんも、実

しい肌を見せていく。

テレビカメラが回り、その前でジーンズ姿、長髪にヒゲもじゃの若い造形美術家グループが小声でささやき合っている。見知らぬ明治を背景にしたテーマをジーンズ姿の若



神戸東遊園地の顕彰碑